

伝説のラーマ王国——ヒンドゥー教聖地の栄光と重荷

宮本久義

一、はじめに

インドは多民族、多宗教、多言語の国である。ちょうどヨーロッパ連合（EU）と同じくらいの地域に異なった価値観を持つ人々が暮らしているといつたら少しはイメージが浮かぶかも知れない。このような多次的社会では、人々の帰属意識も多様である。アーリヤ民族に属し、宗教はヒンドゥー教で、母語はラージャスターニー語という人もいれば、ドラヴィダ民族で、宗教はイスラーム、母語はタミル語という人もいる。インドはおおむね言語の違いによって州が区分されている。今、例えばあげたラージャスターニー語は、主にインド西部のラージャスターン州で使用されている言語、タミル語は南東部のタミル・ナードゥ州の言語であるが、それらを含む公用語は二〇を超える。しかし、その州分けと諸宗教徒の地域分布は重ならない。そのような状況下、人口の約八二パーセントを占めるヒンドゥー教徒と約一一パーセントのイスラーム教徒のそれぞれ一部が各地で対立している。特に両者がともに聖地としている北イン

ドの聖地バナラス（別名ワラーナサイ、ベナレス）、アヨーディヤー、マトウラーでは、警察が常駐して警備する状態が何年も続いている。今回はそれらの聖地のうちバナラスで毎年秋に開催されるラーム・リーラーという祭礼を中心に、ヒンドゥー教徒にとつての喜び、幸せとは何だろうか、またそれは他の宗教を奉ずる人々、とくにイスラーム教徒（以下、ムスリムと呼ぶ）の集団といかなる関係を有するものなのかに焦点を絞って、多文化共生について考えてみたい。

二、ラーム・リーラーとは

最初に、ラーム・リーラーの説明を簡単にしておこう。この劇は、叙事詩『ラーマヤナ』（紀元後三世紀頃成立）に題材をとったもので、英雄ラーマが王位継承を中断されて森におもむき、そこで羅刹王ラーヴァナに誘拐されランカー島に幽閉された妻シーターを、悪魔たちとの熾烈な戦いの末に奪還し、最後にはめでたく王位を継承するという、英雄流離譚仕立ての恋愛ドラマである。『ラーマヤナ』のうち、比較的后代に成立した部分ではラーマはヴィシュヌ神の化身とされるが、その後一〇世紀以降各地で翻案が作られるに従って神格化の度合いが深まった。とくに、トゥルスィーダース（一五三二〜一六二三）の『ラームチャリトマーナス』（ラーマの行状の湖）は、朗唱、歌唱、語り、あるいはラーム・リーラーという劇のスタイルを通じて民衆のあいだにラーマ信仰を普及させるのに多大な貢献をした。

バナラスのガンジス川東岸のラームナガルという町で行われるラーム・リーラーは、約一カ月間という長さもさることながら、普段数万人の人口が五万人から最大るときで一〇万人の

見物客でふくれあがるインド最大の祭りである。ラームナガルのラームとは、ラーマのヒンディー語の発音で、ナガルは町の意味、すなわちこの町自体が「ラーマの町」なのである。ラーム・リーラーのリーラーは遊びという意味であるが、とくに、超越的な神が現象世界に関与する際の自由自在な行状を指し、日本では「遊戯」と訳されることが多い。それゆえ、主役の演者は上演中神々が降臨したものと崇められ、神々によって生きられる時間（叙事詩の時代）を今ここに人間が共有するという、神劇とでも呼ぶスタイルをとっている。

ラーム・リーラーの起源に関しては、トゥルスィーダースあるいはその弟子ともいわれるメーガーバガットが始めたという説が一般的で、ラームナガルではバナラスの藩王ウディット・ナーラーヤン・スイン（在位一七九六〜一八三五）が、近隣のチャーター・ミルザープルで行われていたラーム・リーラーを⁽¹⁾観て自分の領地で拡大したものを始めたといわれる。

三、ラーム・リーラーの特徴

ラーム・リーラーの特徴を簡略にまとめると次の三点になる。

① 祭礼的側面

ラーム・リーラーは第一に庶民のための祭礼であり、庶民を楽しませる工夫が多々用意されている。物語は庶民が幼少時から馴染んできたものである。バラモンの少年（八〜一五歳）から選ばれたラーマとその異母弟



19世紀初頭のパナラス、ラームナガル地区のラーム・リーラー (Prinsep, James, *Benares Illustrated*. Calcutta, 1833より) イギリス行政官ジェームズ・プリンセップは、自身も画家があり、パナラスの風景を多く描写している

(1) 詳しくは、宮本(2008:「ヤム」)

「はいはい」の哲学——初期仏教からみた他者や他宗教との共生

堀内俊郎

他の者らは知ることがない 「われらはここで死ぬのだ」と

しかしそこで知る者らに ⁽¹⁾ どの争いもそれより静まる

一、はじめに

初期仏教——正確には初期仏教経典——からみた共生ということについて論じ、「はいはい」の哲学」というものを帰納的に取り出してみたい。一言でいえば、他人からの非難や意見には、それが自己の究極的な目標（仏教でいえば悟り、涅槃、解脱もしくは生しょう天てん）に関係せず、かつ、的外れなものであるならば、「ああそうですか」「はいはい」と思っただけで受け流せばよい、これが争いをなくすという意味での共生の智慧であるということである。

まず、初期仏教や共生という語で筆者が何を指しているかを明確にしておく必要がある。

初めに、仏教についていえば、「八万四千はちまんしせんの法門」と言われるように、その教えは多種多様である。さらにはそれに対する個々人の理解もそれに輪をかけて多様であろうから、仏教に関心

(1) 『中部』二二八経（片山一良訳、D h P、六偈参照）。

のある人の数だけ、仏教理解があるといつてよい状況である。その中、本稿での資料範囲は、初期仏教経典、具体的には、現存の四阿含・五ニカーヤである⁽²⁾。幸いなことに現代ではそれに対する和訳が充実している⁽³⁾。それを、虚心坦懐に、共生ということを念頭に置きながら精読するということが、筆者が本稿を執筆するにあたって準備したことである（本稿では阿含・ニカーヤの全体を資料とした。そのうちでも新古の層があり、韻文、特に『スッタニパータ』（S_N）のうちの最後の二章が特に古いとされていることは承知している。ただ、そのみを資料として釈尊の思想もしくは初期仏教の思想を探ろうという試みがいかに「いびつ」な仏教理解をもたらしたかは、近代の仏教文献学が如実に示したことである。客観的な学問成果という装いをしながらも、結局、人は、「個人の思想信条あるいは社会的な立場上の点から、」自分の見たいものしか見ない、理解したいものしか理解しない（できない）ということであろう。本稿も、資料選択にあたっては特定の二次資料によつたのではなく筆者自身が仏典を精読して資料を選択したのであるからそのような批判を免れないであろうが、仏教の基本的な考えを踏まえた上で、必ず典拠を挙げ、典拠に語らせるといふ姿勢で論じてみた）。

次に、共生といつても様々である。こんにち共生と名のつく書籍が巷間に溢れかえつており、ゆえにそれに対する心理的リアクタンスも表明されるまでに至つており、筆者もどちらかといえばそれに与するものである⁽⁴⁾。

今日言われている共生は、大まかに分ければ、次の三通りにならうか。

- ① 社会的・人種的・性的な弱者やマイノリティーの権利拡大（あるいは少なくともマジヨリテイーと対等になるように）を主張するもの
- ② 宗教・文化の違いから生ずるさまざまな軋轢に、対話や共通の思想基盤を提示することに

より、打開策を見いだそうとするもの

- ③ 過去の共生の失敗例に学び、なぜ失敗したかという原因をさぐり、「なぜ共生できないのか」「共生は可能か、そしてそもそもそれは必要か」と、批判的観点から、共生の意味と限界を問ひ直すというもの

①については、より広がりつつある格差問題も含めて大いに取り組みが期待されるのであるが、基本的には政治問題・社会問題であり、共生を宗教・思想の面から考えるという本稿の主題ではない。ただ、それらの問題を根源的に考え直すという点では哲学や思想の役割は重要であろう。②については、たしかに対話は重要であろう。また、神は様々な名を持つのであつて異なつた宗教も実は同じものなのであるという融和主義による共生も、古来から提唱されてきたことであり、現代でも見られる⁽⁵⁾。ただ、それによつて何か現実が変わつたということ、寡聞にして聞かない。そろそろその限界を自覚し、他の方途を探る必要もあるのではなからうか⁽⁶⁾。

そこで、③のような視点も必要とならう。大まかに分類すればそのような視点のもと、本稿で筆者がいう「共生」の意味するところは、個人がいかに心の平安を得るかという、個人主義の立場である。これは、やはり、少なくとも初期仏教の基本的性格から必然的に採る必要のある態度である⁽⁷⁾。ただ、そこで注意しておかねばならないことは、そこに他者との関わりということがないわけではないということである。否、人間、ひいてはあらゆる生命は一人では生きていけないものであるので、個人主義、出家中心主義の初期仏教といえども自ずから他者との関わりということが問題となつてくる。共生への智慧も、初期仏典には説かれているのである。また、その際、仏教が単なる世間的な倫理や道徳ではないとするならば、その究極の目的（涅槃・解脱、あるいは生天）との関連から、共生ということも考えねばならないであろう。

(2) 経・律・論の三蔵（さんぞう）のうち本稿が扱うのは経蔵（きやうぞう）に關してである。そのなか、初期仏典としては、南伝ではパーリ語の『長部（じやうぶ）（D_N）』『中部（ちゆうぶ）（M_N）』『相應部（さうじぶ）（S_N）』『増支部（ぞうしぶ）（A_N）』『小部（せうぶ）』の五部もしくは五ニカーヤがある。北伝では、維・中・増一・長の四阿含である。本稿では『小部』としてはS_N、D_{hp}のみを資料とする。

(3) 末尾の「文献」を参照。

(4) そのような意見が近年多く見られるようになってきていることは、拙稿で紹介した通りである。「仏教における共生の基盤の可能性としての捨（upajāta）」（『国際哲学研究』一〇、二〇一二年、一一九～一三五頁）。

(5) 現代ではジョン・ヒック（たとえば『神は多くの名前をもつ：新しい宗教的多元論』岩波書店、一九八六年、

原著 *God Has Many Names*, 1982）が唱えたが、大まかにいえば古来からある融和主義の亜種に過ぎない。「リク・ヴェータ・個々の詩人の中に、多神教の世界に疑問をいだき、多くの神々は結局一神のさまざまな現われ方であり、一神の別名にすぎないと考える者もあつた」（辻直四郎『インド文明の曙』岩波新書、一九六七年、九二頁）

(6) なお、『多文化共生』を問ひ直す「グローバル化時代の可能性と限界」（龍谷大学、二〇一四年）という書籍も出ている。

(7) これは大乘仏教における共生の態度に対して何らかの含意を持つものではない。大乘仏教における共生ということは別個の課題である。ところで、儒教には「修己治人」という考えがある。格物・致知・誠意・正心・修身・齊家（せいしか）・治國・平天下であり（『大学』第四節）、要するに、心が正しければやがて天下も太平となるというのである。初期仏典でも多少似た話がある（『増支部』二・七〇）。だが、それは心を正すことを主眼とした方便説と見べきであろう。

VI

座談会——現代日本の宗教状況をどう考えるか

*この座談会は、二〇一五年五月八日に東洋大学白山キャンパスで行われたものである。「多文化共生を考える」を大きなテーマとし、「現代日本の宗教状況をどう考えるか」に論点を絞り、古典研究に立脚した三名に、以下のご論考を共通の素材とし、多文化共生につながる現代的な課題へ向けて提言していただいた。

・末木文美士著『反・仏教学 仏教vs.倫理』（ちくま学芸文庫、二〇一三年）は、現代の葬式仏教をどう捉えるかを考える際に、「顕」なる人間の領域と「冥」なる他者の領域、とりわけその最たるものである死者との共生という視点が有効な手がかりを与えている。

・齋藤明著「いま仏教に望まれるもの——二十一世紀の仏教のあり方を考える」（『仏教経済研究』第三九号、駒澤大学仏教経済研究所、二〇一〇年）は、仏教が危機的状態にある今日、その自覚を宗派や教団の枠を超えて共有しあうことが必要であり、そのために仏教学が担うべき課題は仏教理解の裾野を拡大させていくことにあるという道筋を示している。

・鎌田東二著『神と仏の出逢う国』（角川選書、二〇〇九年）は、神仏の習合を常態とする日本という土壌を感じしつつ、さまざまな宗教文化が交差しあう方向を切り開くには、個々人が霊性（スピリチュアリティ）を自覚することが基盤になるという示唆を与えている。

菊地 本日の論点になります問題の根源は、明治維新によって日本の宗教界が大きな危機を迎えたところにさかのぼると考えられます。文明開化によって仏教が時代遅れ、迷信の権化と見なされていく中で、前近代的なイメージを払拭させ、これを学問的な研究対象に高めていく方向へとシフトさせた。そのとき哲学としての仏教という新しい方向が開拓されました。それを担ってきた人々の中には東洋大学のもとになった哲学館を創設した井上円了（一八五八—一九一九、哲学者。『仏教活論序論』）もいます。そうした近代仏教学の伝統の中枢に、いま齋藤先生が立つておられるわけです。

学問としての仏教学や、哲学としての仏教を構築していくことが近代仏教の歩んできた道のりの一つであったとします

末木文美士（日本思想史。国際日本文化研究センター名誉教授）
齋藤 明（インド大乘仏教。東京大学教授）
鎌田東二（宗教哲学・民俗学。京都大学教授）
菊地章太（カトリック神学。東洋大学教授。司会）

と、その枠組みから切り捨てられてきたのが葬式仏教であり、あるいは神仏習合というありようだと思います。末木先生は最近のご著書の中で、日本仏教における葬式仏教の重要性やその大きな価値を取りあげておられます。かたや鎌田先生は日本の宗教の現実の姿として神々の神神習合、あるいは神と仏の神仏習合を多くのご著書の中で主張しておられます。

先生方には現代の宗教をとりまく状況に対する批判的な分析と、その先の多文化共生という将来への見通しを語っていただきたく思います。もちろん共生という姿勢を肯定的に捉えるだけでなく、懐疑的な、あるいは否定的な方向も当然ありますので忌憚のないご意見を頂戴できればと存じます。

共生における統合の危険性………末木文美士

末木 共生という問題であれば、宗教間対話の可能性をどこに求めるかを論じた抜刷をお配りしました。また、本書では親鸞について書かせていただきました（本書227頁「選択から統合へ」参照）。というのは、いま集中的に親鸞のことをやっていまして、今までの見方ですと、法然や親鸞は一向専修で他のものをみな否定するというように単純に捉えられていたのですが、一体そうなのだろうか、むしろ親鸞は阿弥陀仏によって全仏教を統合するような方向性を求めているのではないのかというところを書きました。ここでは、その先の話をいたします。

一つは、その前の時代の密教と関係してきます。例えば、覚鑿（一〇九五）。平安後期の僧で真言宗中興の祖）においては、大日如来が全部統合していく、阿弥陀仏はその中の一つの表れとして理解されています。それを、いわば上下をひっくり返したのが親鸞なのです。ですから、そのおおもとは院政期の密教によってすでに準備されていただろうと。それは一つの中にすべてを統合していくような、全部自分の位置に収めていくという考え方です。それは、他のものを単純に否定するのではなくて、むしろ統一していくという方向性を持っていて、一種の「統合的なもの見方」ということができます。それ

ではこの統合的なもの見方を現代に用いて解決がつくのかというと、かなり危ないところがあります。例えば、戦争中に日本の仏教者は盛んに「大乘」ということを言いました。大乘仏教というのは小乗仏教を統合するものだという形で、究極的には大乘仏教が最高に達した日本の仏教によって、すべての仏教は統合されると、それこそが大東亜共栄圏になるのだという形で、「大乘仏教論」が戦争の論理に組み替えられていくようなことが現実起こっていたわけです。とすると、統合論だけで一体片が付くのだろうかという問題になってくるわけです。

そこで、『反・仏教学』の議論にもう一度戻していきますと、他者あるいは他者性というものが、どれだけその統合をはみ出していくのかという問題になっていくのではないかと。全部が統合されてしまうということは、他者的なものがなくなってしまうことなのですが、果たして他者的なものがないことということがあるのだろうかという問題になってきます。

これも実は本書の「選択から統合へ」で論じたのですが、親鸞の場合は晩年に「自然法爾章」（『末灯抄』第五通）で「無上仏」という言い方をされるのですが、いわゆる法身と、いわば報身的な阿弥陀仏がどう関わるのかという問題が出てきます。これは西田哲学的な言い方になりますが、「場所」とい

うものの中に他者が吸収されていつてしまうのだろうか、という問題になるのです。これは西田幾多郎（一八七〇。哲学者。『善の研究』）と田辺元（一八八五。哲学者。『懺悔道としての哲学』）とが論争をした問題にもなります。田辺は西田的な場所を拒否しようとしています。この問題はキリスト教と仏教の相違にも関係します。キリスト教は徹底的に超越の方向を目指しますが、仏教では一種の内在という方向性を無視できない。現代哲学ですと、フランスのジャン・リュック・マリオン（一九四六年生れ。フランスの哲学者。『存在なき神』）とジャック・デリダ（一九三〇。フランスの哲学者。脱構築（デコンストラクション）という形而上学批判を行った）の間で論争がなされています。マリオンは頑固なカトリックですので、要するに「神による贈与」を一番の軸において考えていくのに対して、デリダはプラトンが立てる「コーラ」、場所的なコーラに解消していくというのではないかという議論がなされます。

そのあたり、私にとつてもまだ十分に解決していない対立が残っているのです。いわばユダヤ教系の一神教と、それに対するアジア的な、井筒俊彦（一九一四。哲学者、言語学者。日本におけるイスラーム哲学研究の基盤を形成した）の言葉を使えば神秘主義になりますが、神秘主義的な一理論の立場と、両者がどう関係していくのかという問題にもなっていくかと思っています。

菊地 統合的な方向をめざすことの可能性とさらに危険性についてお話しいただきました。そこでは他者性が統合という方向からはみ出していく場合が考えられますし、あるいは他者的なものがなくなるといふ事態さえあるかもしれない。そのことを考えるうえで、一神教とアジア的な諸宗教の一体性も視野に含めていかなければなら

*「宗教間対話を可能にする理論を求めて」（『キリスト教文化研究所紀要』三三三、二〇一四年）特に仏教とキリスト教の対話を日本という場で可能にするにはどうしたらよいかという問題を追究した。日本の伝統的な世界観は、「顕」（表に現れた世界）とともに「冥」（陰に隠れ理性的な探究できない世界）があるという二重構造になっている。このような世界構造の奥に深まっていくことが仏教では求められるが、キリスト教などの一神教的な「神」はこうした世界をさらに超越していくという相違があり、そのことを理解したうえで対話の可能性を探る必要がある。

*コーラ プラトンの『ティマイオス』に出る。デミウルゴス（世界の創造者）がアイデアに基づいて世界を作るとき、それを受け入れる場所。デリダに『コーラ プラトンの場』の著書がある。

